非人情ナチュラリストの楽しみ
――環境文学としての夏目漱石『草枕』――

田　中　俊　明

要　旨

本論文では、『草枕』の主人公である画工に象徴されるように、自然の一部としての人間の立場から自然を愛好し、自然との一体感を喜び、楽しみ、そこから美と自由と安らぎを得る人々を非人情ナチュラリストとして定義し、漱石の生きた近代よりも現代においてより深刻化しているようにみえる自我の孤立と文明の束縛による苦しみから解放されるために、また、近代以降の文明がもたらした環境問題に対処していくために、非人情ナチュラリストの生き方が最も有効な手段であるということについて考察する。

キーワード：夏目漱石，草枕，自然，環世界，環境文学

雲雀の声に胸が躍る環世界

『草枕』は、自然と自然の点景としての人間が織りなす美しさと自由で安らかな雰囲気が全編に漂っており、読むとすこぶる愉快な気分になれる小説である。物語の冒頭から、主人公の画工は山路を登りながら、山桜が薄赤く棚引くのを眺め、雲雀が元気よく鳴きつづける声を聞いて愉快な気持ちになる。一面に咲く菜の花を遠く望み、菜の花に気をとられて踏みつけた蒲公英に関心を示す。そして、「詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば微塵の苦もない。菜の花を見ても、只うれしくて胸が躍るばかりだ。蒲公英もその通り、桜も一桜はいつか見えなくなった。こう山の中へ来て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。」、「只この景色が一腹の足しにもならぬ、月給の補いにもならぬこの景色が景色としてのみ、余が心を楽ませつつあるから苦労も心配も伴わぬのだろう。自然の力はここにおいて尊とい。」と語る（以下、本論文における『草枕』本文からの引用は、夏目（1950）から引用する）。この画工の言葉に象徴されるように明治の文明開化以前には、自然の景物に接して胸が躍る人々がたくさんいたであろうことが想像される。現代の日本においても、山桜、雲雀、菜の花、蒲公英は決して珍しい自然の景物ではない。蒲公英については在来種から外来種に置き換わりつつあるが、どれも春になれば全国各地において郊外の農耕地とその周辺の野山で見られるありふれた動

植物である。しかしながら、現代では天高くさえずる雲雀の声を聞いて愉快な気持ちになる人はめっきり減ってしまった。特に若い世代の人々の中では、自然の景物に接して胸を躍らせる人はもはや絶滅危惧種になりつつある。

動物行動学の先駆的研究者であるユクスキュル（2005）は、1933年に『生物から見た世界』という本を著し、「環世界（Umwelt)」という考えを提唱した。環世界とは、それぞれの動物がその動物に固有の知覚の枠のもとに認識している世界のことである。同じ環境に生息していても、それぞれの動物主体が認識しているのは、人間が客観的に記述している環境ではなく、それぞれの動物主体にとって意味のある諸物が組み合わされて構築された主観的な環境である。したがって、環世界は、動物の種によって、また同種内でもそれぞれの個体によって異なっているという。『生物から見た世界』を日本語に訳した日本の動物行動学界の草分けである日高敏隆（2007）は、動物たちの環世界というものは、客観的な現実世界というよりも、個々の動物たちのイリュージョンが作り上げた世界であるとし、人間以外の動物たちは遺伝的に形成された知覚の枠に限定されたかなり固定したイリュージョン（環世界）をもつのに対して、人間では、やはり遺伝的な知覚の枠に限定されてはいるものの、それを超えて理論的にイリュージョン（環世界）をつくりあげることができると述べている。そして、時代や文化によってもイリュージョン（環世界）は変わりうると述べている。例えば、時代によって地球は平らなものから球体にかわり、動くのは太陽ではなく地球だということになったように、人間が客観的だとして記述する世界についても、その時代時代に客観的だとして認識されているイリュージョン（環世界）なのである。

それでは、『草枕』の画工に象徴される文明開化以前の日本人の環世界とは、どのような環世界であったろうか。それは、人間を「大自然の点景として」とらえる環世界ではないだろうか。つまり、自然と人間との間に境界を設けず、人間を自然の一部としてとらえ、自然と一体であるという感覚もって生きるという環世界である。自然と人間という意識的な分別をもたないで生きるという環世界である。『草枕』にも登場する漢詩や俳句、書画や禅の世界、他にも『万葉集』などの短歌、『枕草子』などの古典文学、旬の自然を味わう日本独特な料理や日本の気候風土に適応した木造の建築様式など四季の自然に調和した暮らしの様々な文化、里山の生活様式や風景などに代表されるように、ひと昔前までの日本人は、人間を自然の一部としてとらえ、自然を愛好し、暮らしの中に取り入れ、東洋・日本的な無常観の中で自然と一体になって生きることをよしとする文化があった。『草枕』を1965年に英訳したAlan Turneyは、その訳書の訳者序文で、“If it is true that one can come to know a people through its literature, then I believe that Kusa Makura tells us more about the Japanese than any other book written since the beginning of the Meiji era.”（Soseki, 2011）と述べているが、『草枕』は日本人の人間観や自然観を知るためには格好の文学作品の一つであると考えられる。文明開化以前の日本

人の環世界においては、『草枕』の世界のように、自然との一体感にあふれ、天高くさえずる雲雀は生き生きとした意味を持ち認識されていたと思われる。一方で、現代の多くの日本人の環世界においては、雲雀は物理的・客観的に存在していても意味を持つどころかほとんど認識されていない。

自我の孤立と文明の束縛による苦しみ

文明開化以前の日本人の環世界に基づく人間観・自然観は、西洋のそれとはだいぶ異なっている。大森（1994）は、西洋では16～17世紀に科学革命がおきて誕生した近代科学によって人間観と自然観はがらりと変わったことを指摘している。東洋、特に日本では幕末から明治にかけての西洋思想の流入期に同様の変化が起きたとしている。自然の死物化と心の主観化・内心化が進行し、現代人から、古代・中世の人々がもっていた、活物自然と自己との一体感を奪い、自然を生き生きと活きたものと感じ、自分をその一部として感じる感性を奪ったと述べ、そしてそのような感性を何か未開のもの、迷信的なもの、と感じる近代的感性に支配されるに至り、さらにそれを近代的自我の確立などと称するに至ったと大森（1994）は批判している。人々は、主観と客観、精神と物質、自分と世界を分別して考える環世界をもつようになった。この過程で、主観的なものや人間にとっての意味あるものは排除され、それが生活の全てに及んだというのである。

夏目漱石は、江戸最後の年の慶応三年（1867年）に生まれて、明治時代を通して生き、大正五年（1916年）に亡くなった（夏目，1950）。まさに、文明開化の名のもとに近代科学の人間観・自然観に基づいた近代的自我の思想、近代化された文明が流入してきた時代とともに生きた人である。『草枕』を書くことができた漱石は、文明開化以前の東洋・日本的な人間観・自然観の中で成長したと思われる。それと同時に、その後の作品群にみられるように、近代的自我の思想を吸収し、自己本位に根ざす個人主義を確立する一方で、エゴイズムや自我の孤立に苦悩した人でもあった。自我を貫くことにともなう苦しみを鋭く感じた人であった。漱石は自我について、『文学の哲学的基礎』（磯田，1986）で「吾人は今申す通り我に対する物を空間に放射して、分化作用でこれを精細に区別して行きます。同時に我に対してもまた同様の分化作用を発展させて、身体と精神とを区別する。その精神作用を知、情、意、の三に区別します。」と述べているように、知・情・意の精神作用を生みだすもとは我であると考えていたようである。『草枕』のかの有名な出だし、「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」とは、知情意の自我を貫くことにともなう苦しみを表現している。また、我を身体と精神に分けて考えるデカルト的な心身二元論の自我の見方を受容していたことがうかがえる。

当時の日本全体を覆っていた近代文明の波に対して、漱石はその負の側面を鋭く見抜いてい

た。個人が望むままに自由に生きようとするとき、近代文明というシステムのなかでは逆に個性が奪われて管理束縛されてしまうという矛盾である。『草枕』の終り近く、停車場で久一を見送る場面で、漱石は画工にこう語らせている。「愈現実世界へ引きずり出された。汽車の見える所を現実世界と云う。汽車程二十世紀の文明を代表するものはあるまい。何百と云う人間を同じ箱へ詰めて轟と通る。情け容赦はない。詰め込まれた人間は皆同程度の速力で、同一の停車場へとまってそうして、同様に蒸氣の恩沢に浴さねばならぬ。人は汽車へ乗ると云う。余は積み込まれると云う。人は汽車で行くと云う。余は運搬されると云う。汽車程個性を軽蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏み付け様とする。」この漱石の警鐘は、近代の文明に対するものであったが、その約100年後の現代の文明では、ますます悲惨な状況になっているように感じる。近代的自我という概念を確立して以降、個人の望みのままに自由に生きたいと自我へ固執する人々の欲望は、科学技術や経済の急激な発展にともない現代文明という途轍もなく巨大な欲望の汽車を産みだした。この欲望の汽車は、いま世界を股にかけて暴走している。人々は自覚症状がないままにそそのかされて現代文明の虜になり、管理束縛され、欲望の汽車の客車につめ込まれ、欲望のもぐらたたきゲームに興じている。望み欲しがるままに大量に生産し、大量に消費し、大量に廃棄して全地球的規模で環境を破壊し続けている。ままならない自然をどんどん排除していき、制御された快適で便利な生活を望む。欲望を満たしても、すぐに次の欲望が現れる。やめられない、とまらない。そうして人々は、自我を主張すればするほど孤立してゆき、欲張れば欲張るほど束縛され、不安で落ち着かない日々を送る。いつまでたっても、どこまでいっても心の自由と安らぎはやって来ない。

非人情ナチュラリストとは

ナチュラリストとは、一般的には西洋の博物学の歴史と伝統の中で、野外の自然物に強い好奇心を抱き、それを愛好する人、もしくは観察・研究しようとする人々のことを指す。つまり、西洋のナチュラリストのスタイルは、近代科学の方法論に基づき、自然を人間とは切り離した対象としてとらえるという立場をとる。これに対して、本論文では、『草枕』の主人公である画工に象徴されるように、人間を自然から切り離さない、自然の一部としての人間の立場から自然を愛好し、自然との一体感を喜び、楽しみ、そこから美と自由と安らぎを得る人々を非人情ナチュラリストと定義する。非人情とは、不人情ではない。無感情とも違う。非人情とは、漱石が森田草平に宛てた手紙にあるように、「自然天然は人情がない。見る人にも人情がない。双方非人情である。ただ美しいと思う。」(三好, 1990) という、自然のように我執を超越した感情であり、自然との一体感の中で美しい自然に触れてただ無邪気に美しいと感じる感情である。『草枕』の画

工の願いは、「只一人絵の具箱と三脚几を担いで春の山路をのそのそあるくのも」、「わざわざ呑気な扁舟を泛べて桃源に溯る」ような「淵明、王維の詩境を直接に自然から吸収して、すこしの間でも非人情の天地に逍遥したいからの願。」である。また、画工の方針は、「こうやって、美しい春の夜に、何等の方針も立てずに、あるいてるのは実際高尚だ。興来れば興来るを以て方針とする。興去れば興去るを以て方針とする。（中略）こうやって観海寺の石段を登るのは随縁放曠の方針である。」という方針である。別の場面で、画工は草にごろりと寝ながら次のような詩をつくる。「出門多所思。春風吹吾衣。芳草生車轍。廃道入霞微。停筇而矚目。万象帯晴暉。聴黄鳥宛転。観落英紛霏。行尽平蕪遠。題詩古寺扉。孤愁高雲際。大空断鴻帰。寸心何窈窕。縹緲忘是非。三十我欲老。韶光猶依々。逍遥随物化。悠然対芬菲。」この詩は、『春興』というタイトルで、明治31年3月の漱石が熊本に在住している時に作られたとされている。小宮（1987）も述べているように、おそらく漱石は自らの人生で実際に体験した春にまつわる自然体験を総動員して『草枕』を創作したと思われる。さて、この詩の大意は、「わが家の門を出て歩めば春の物思いがあふれ、春風は衣に吹きいってくる。轍のあとにかぐわしい若草が萌え、通る人もない廃道ははるか霞のかなたへと続いている。足をとどめてあたりを眺めると、すべての物象は晴れやかに光り輝いて、鶯のさえずりがきこえ、桜の花の乱れ散るのが見える。道の尽きるところに平原がひらけ、とある古寺の扉に詩をかきつけてみる。孤り歩きの寂しさは果てしない空にひろがり、群れを離れた孤雁が北へ帰ってゆく。心というものはなんと奥ぶかいものであろうか、今はただ恍惚として俗世間のわずらわしい是非善悪などは忘れてしまった。自分ももう三十歳をすぎて、老境に入ろうとしているが、のどかな春景色はやはりやわらかく身にまつわるようで、したわしい。そぞろ歩きながら万物の変化に随順し、悠然としてかんばしい春の草花に身をまかせている」（夏目（1950）の注解315）というものだ。社会の常識や固定観念にとらわれることなく、自由気ままに、自然の天地を逍遥し、自然美を愛で、無常の変化の流れにただ自分をからっぽにして随順していくという東洋・日本の伝統的な遊びの精神が『草枕』の中には凝縮されている。こうした生き方を非人情ナチュラリストの生き方と呼びたい。

漱石晩年の人生観を要約する言葉として「則天去私」という言葉が知られている。この言葉の意味については、数人の弟子たちとこれについて話し合ったといわれているだけで、漱石自身がこの言葉の意味について書いたものはないので、考察や議論の対象になってきたらしい（アラン，1999）。ただ、新潮社版の『大正六年　文章日記』（大正五年十一月刊）の無署名の解説に「天に則り私を去ると訓む。天は自然である。自然に従うて、私、即ち小主観小技巧を去れという意で、文章はあくまで自然なれ、天真流露なれ、という意である」と書いてあり、漱石の目にもふれていたと考えられている（夏目，1996）。「文章はあくまで自然なれ」とあるように、この言葉は文章表現の方法について述べているようにも取れる。しかしながら、「則天去私」という言葉の出所が、「則天」を『論語』に、「去私」を『呂氏春秋』に見つけられるように（アラン，

1999)、自然という無常の変化の流れにただ自分をからっぽにして随順していくという東洋・日本の伝統的な生き方と深く共鳴している。この伝統が漱石に受け継がれ「則天去私」という言葉に結晶したという側面もあると思う。本論文では、この言葉を後者の側面で拡大解釈して、東洋・日本の伝統的な生き方を表す言葉として考えたい。また、いくつかの文献（例：岡崎，1968；アラン，1999）が指摘しているように、後に「則天去私」へと至る思考の芽生えが『草枕』やその中にでてくる非人情という思考にみられるというのはとても肯定できる。後で少しだけ述べるように、「則天去私」という生き方は『草枕』のところどころで表現されている画工の生き方と通底していると考える。

自由と安らぎは我を忘れたころにやってくる

さて、非人情ナチュラリストである画工は、累々とどこまでも空裏に蔓る木蓮の花など自然の美しさに見とれて茫然とするといったように、自然に接して我を忘れる体験を繰り返す。我を忘れる体験といっても、難しい哲学的、宗教的な体験ではない。子どもたちが没頭して遊んでいるときの、あの無我夢中の体験と同質ものである。我を忘れて遊ぶ子どもたちにとっては、子どもたち互いどうしの分別もなければ、周囲の環境と子どもたちとの分別もなくなり、すべてが一体となって同化し、自分という意識は消えてなくなる。遊んでいてただ楽しいという気持ちがあるだけだ。

夕暮れの机に向かいぼかんとした心理状態に落ち入る場面では、「強いて説明せよと云わるるならば、余が心は只春と共に動いていると云いたい。あらゆる春の色、春の風、春の物、春の声を打って、固めて、仙丹に練り上げて、それを蓬莱の霊液に溶いて、桃源の日で蒸発せしめた精気が、知らぬ間に毛孔から染み込んで、心が知覚せぬうちに飽和されてしまったと云いたい。普通の同化には刺激がある。刺激があればこそ、愉快であろう。余の同化には、何と同化したか不分明であるから、毫も刺激がない。刺激がないから、窈然として名状しがたい楽がある。」と画工は春という環境全体に縦横無尽につながり同化して安らいでいる心境を説明する。ここには、本来の我という存在の真相の一面が浮き彫りにされているように思う。本来の我とは近代的自我の生みの親ともいえるデカルトが考えたように、精神と身体に分けられるものではなく、我と世界に切って離せるものでもない。しかも、我とは、意識できる我だけで成り立っているわけではない。本来の我は、便宜上区別すれば、意識できる部分＝我（意識）と意識できない部分＝我（無意識）で成り立っている。しかも、我の行動において、我（意識）はこれまで考えられているように中心的・主導的な働きをしているのではなく、実は我（無意識）の方が身体を通して周囲の環境と相互作用しあいながら陰でせっせと働いて大きな役割を果たしているということが現代の認知科学や脳科学により明らかにされつつある（下條，1999)。意識にはいまだに解明され

ていない多くの謎が残されているが、これまでわかってきた範囲では、意識とは私たちが通常考えているようなものではなく、意識は錯覚であり（スーザン，2010)、意識は傍観者的な働きしかしていない（デイヴィッド，2012）というような見方もでてきている。いずれにしても、我（意識）は、一般に考えられている以上に中心的・主導的でないものであり、我（意識）が思うゆえに我ありというのは錯誤であるようだ。デカルトは、我（無意識）の思考への影響ついては考えていなかった。脳は身体に組込まれており、身体は環境に組込まれている。本来の我（意識＋無意識）は、そうした脳と身体と環境が縦横無尽に相互作用する関係によって成立し存在するというのが真相であるのではないだろうか。我（意識）が思っただけでは、我は存在できないのだ。そして、自由な行為とは、常識に反して、意識にのぼりにくいとき、つまりもっとも没頭して我を忘れているときに実現するという（下條，1999)。まさに画工は春の中で我（意識）を忘れて自由を満喫しているのである。

温泉につかる場面で画工は、「余は湯槽のふちに仰向の頭を支えて、透き徹る湯のなかの軽き身体を、出来るだけ抵抗力なきあたりへ漂わして見た。ふわり、ふわりと魂がくらげの様に浮いている。世の中もこんな気になれば楽なものだ。分別の錠前を開けて、執着の栓張をはずす。どうともせよと、湯泉のなかで、湯泉と同化してしまう。流れるもの程生きるに苦は入らぬ。流れるもののなかに、魂まで流していれば、基督の御弟子となったより有難い。」と語る。湯の中にふわりふわりと重力の重みから解放されて漂って遊んでいるうちに、湯と画工との境界がなくなる。我（意識）が消えてなくなり湯に同化してしまう。このような我（意識）と湯との境界が消失し、湯に同化する体験は人生の至福の喜びではないだろうか。温泉は、地熱が生み出す自然の恵みである。温泉の湯につかって我を忘れる体験は、まさに地球の熱と一体になる最高の自然体験である。火山列島である日本にはたくさんの温泉がある。世界一の温泉天国に住む日本人ほど温泉につかる楽しみを知っている人々はいないだろう。画工のように俗世間から逃れ自然豊かな山間の温泉に来て、裸になって湯につかれば、自然と「ああ」と声がもれる。俗世間の垢を流し、何もかも忘れて解放され、静かで満ち足りた気持ちになれる。身体の芯から温もり、身も心もゆるんでリラックスできる。湯につかって、「ああ、いい湯だなあ」と全身で感じるとき、我（意識）はどこかに去っている。欲望も苦しみもない。利害打算もない。なにも考えない。純粋に「いい湯だなあ」に同化している。究極のリラックス状態、ただ安らぎだけがある。神経内科医の河村満（1999）は、『非人情の脳内機構』と題する興味深い論考を書いている。その中で、感覚脳と運動脳とが統制されて環境の中に自己をうまく適応させたときに心の静寂が生まれると述べている。そしてその環境の変化の対象は、草木のような自然の外界や芸術性の刺激がよいという。人間の脳は、その進化適応の起こった環境である自然界に身体を通してつながることで安らぎモードに入りやすくなるようにできているのかも知れない。

非人情ナチュラリストの在り方は、大自然の点景として自然という環境の中に組込まれること

である。人間はそうした自然との関係性の中で、自由であり、安らげるし、自然との豊かなつながりの網の目のなかに在ることは喜びなのである。つまり、人生は自然の中で我を意識していないときの方がずっと幸福なのだ。

これからの時代に必要な文化は「則天去私」の文化だ

「茫々たる薄墨色の世界を、幾条の銀箭が斜めに走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思えば、詩にもなる、句にも咏まれる。有体なる己れを忘れ尽して純客観に眼をつくる時、始めてわれは画中の人物として、自然の景物と美しき調和を保つ。只降る雨の心苦しくて、踏む足の疲れたるを気に掛ける瞬間に、われは既に詩中の人にもあらず、画裡の人にもあらず。」、また「勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はそう長く続く訳には行かぬ。」と画工が語るように、我を忘れて自然と一体になって自由気ままに遊んでいる状態も、我を意識した瞬間に終わる。非人情ナチュラリストの自然をめぐる旅もいつかは終わる。しかし、我（意識）に返った後も、旅が終わってからも残るものがある。それは何だろうか。それは自然と一体になっていたという感覚の記憶である。我（意識）に返った後も自然とつながっているというつながりの意識をもつことができるのだ。近代的自我は、我と世界とのつながりを分断してしまった。だが、我を忘れ自然の中で自由気ままに遊ぶ体験で、我は孤立しているのではなく、我（意識）に返って後も自然とともに在るという一体感をもつようになる。こうした体験を繰り返すうちに、自然をかけがえのないものと感じる気持ち、自然に対する畏敬の念、大自然の一部の小さな私という謙虚さなどといった倫理感が心におのずと湧き起ってくると体験的に感じる。『草枕』においても、例えば、鏡が池の湖畔で画工は、「自然の徳は高く塵界を超越して、絶対の平等観を無辺際に樹立している。」と自然の徳を尊敬するような考えを述べたり、木蓮や木瓜の花を擬人化して、奥床しくも自らを卑下した木蓮の花、愚かにして悟った木瓜の花と、大自然の一部の小さな私の分際をわきまえた謙虚な姿を賛美したりしている。こうした倫理感は、漱石晩年の「則天去私」の倫理感へと通じていると思う。環境問題が山積している現代において、上記の倫理感をもつことは、自然を対象としてどうしたら自然を守れるかという科学の方向性ではなくて、人間が自然の一部としてどう生きるべきなのかという倫理の方向性において重要である。もちろん科学の方向性として博物学から生態学を生み出した西洋的なナチュラリストの環世界を生きることは大切であるが、それと同時に倫理の方向性として非人情ナチュラリストの環世界に生きることも大切なのだ。知覚の枠を超えて理論的に環世界を構築できる人間は、複数の環世界をもち、それらを切り替えながら、もしくは重ね合わせて生きることもできる。日高は、『生物から見た世界』（ユクスキュル・クリサート，2005）の訳者あとがきの中で、「環世界」という認識は、「環境」ということばが乱れ飛んでいる現在、ますます今日的に重要な意味を持つ

に至っており、人々が「良い環境」と言う時、それは実は「良い環世界」のことを意味していると述べている。「良い環世界」をつくるためには、論理だけでは不十分で、体験に基づく感性が重要なのだ。環境の世紀と呼ばれる21世紀の人類の生き方は、上記二つの環世界を切り替えながら、もしくは重ね合わせて生きるというのが良いのではないかと提案したい。

画工のように、欲望の汽車を降りて、野山を自分の足で歩こう。草を枕にごろりと寝転んで木瓜の花に見惚れよう。木瓜の花のように拙を守ろう。自我の孤立と文明の束縛による苦しみから解放されるには、また、近代以降の文明がもたらした環境問題に対処していくには、自然から美と自由と安らぎをもらう非自我中心的な非人情ナチュラリストの生き方がもっとも有効な手段であると考える。ごく稀にそう思わない人もいるかもしれないとしても、誰だって美しいと感じるものは壊したくないと思うだろうし、誰にとっても自由と安らぎの源泉はかけがえのないものと感じるはずだ。文明開化以前までの日本人は、画工のように自我を主張しないで、自分を空っぽにして自然と一体になり身をまかせる文化をもっていた。漱石先生の言葉を借りて一言で要約するなら、「則天去私」の文化をもっていた。温故知新。これからの時代に必要な文化は、こうした文化だと思う。一見、自我を主張することをよしとする自我中心の近代・現代の日本人の人生観からみると、自我を主張しないという近代以前の日本人の生き方は不自由で、自分を抑制しなければならない窮屈な生き方のように感じるかもしれない。しかし、真相はその逆なのだ。我（意識）が自分の思うとおりに自由に行動できるという考えは錯誤である。我（意識）に執らわれているうちは、いつまでたっても自由は得られない。むしろ自然と一体になって我（意識）を忘れたときにこそ、非人情でいるときにこそ、のびのびとした自由と安らぎはやってくるのだ。自由と安らぎは、愉快で平穏な人生をもたらしてくれる。自然と一体でいるから、孤立していない。画工にとっての雲雀や菜の花、月や木蓮、温泉に木瓜の花、那美さんに茶屋の御婆さんといったように、人間も含んだ自然と一体となりつながっている自分を感じるとうれしくなる。苦なしに水と一体となって流れて往生する風流な土座衛門、ミレーのオフェリアのように、死ぬことさえも怖くなくなる。身（我）を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれだ。現代人にはこうした思考の転換が必要だと思う。

多くの日本人に、そして世界中の人々に、『草枕』を読んで理解してもらいたい。文明開化以前までの日本人の伝統的な自然と一体となって暮らす文化がもたらしてくれる美と自由と安らぎのすばらしさを知ってもらいたい。日本人の食生活が変わり日本において失われつつある和食（日本人の伝統的な食文化）がユネスコの無形文化遺産に登録されたが、やはり絶滅の危機にある日本人の伝統的な自然と一体となって生きる文化も、ぜひとも無形文化遺産に登録してほしいものだ。世界中の人々に、非人情ナチュラリストの楽しみに気づいてもらいたい。もし、非人情ナチュラリストの環世界を生きる人々が世界中に増えていったならば、地球環境は今よりか少しはましになり、「兎角に人の世は住みにくい」ものではなくなるはずなのだが。

引用文献

アラン，T.　1999　グールドと「非人情」　横田庄一郎（編）　『漱石とグールド―8人の「草枕」協奏曲』　朔北社　pp.29-43

磯田光一編　1986　『漱石文芸論集』　岩波文庫

大森荘蔵　1994　『知の構築とその呪縛』　ちくま学芸文庫

岡崎義恵　1968　『漱石と則天去私』　宝文館出版

河村満　1999　非人情の脳内機構―グールドと漱石の共通感覚―　横田庄一郎（編）　『漱石とグールド―8人の「草枕」協奏曲』　朔北社　pp.165-196

小宮豊隆　1987　『夏目漱石（中）』　岩波文庫

下條信輔　1999　『「意識」とは何だろうか―脳の来歴、知覚の錯誤』　講談社現代新書

スーザン，B.　2010　信原幸弘・筒井晴香・西堤優（訳）　『意識』　岩波書店

デイヴィッド，E.　大田直子（訳）　2012　『意識は傍観者である: 脳の知られざる営み』　早川書房

夏目金之助　1996　『漱石全集　第二十六巻』　岩波書店

夏目漱石　1950　『草枕』　新潮文庫

Natsume Soseki 2011 “The Three-Cornered World” PETER OWEN PUBLISHERS (English translation by Alan Turney and Peter Owen 1965)

日高敏隆　2007　『動物と人間の世界認識―イリュージョンなしに世界は見えない』　ちくま学芸文庫

三好幸雄編　1990　『漱石書簡集』　岩波文庫

ユクスキュル，J. v.・クリサート，G.　2005　日高敏隆，羽田節子（訳）『生物から見た世界』　岩波文庫